名湯・秘湯で湯浴みする（その二九）

［六一］　蕨温泉再訪（二〇一五年）

一一／六（金）　本厚木　六三五
町　田　六五〇
七一六
八王子　七四二
八〇三あずさ三
南小谷一一四二
バス一三二一（村営）
小谷温泉　山田旅館（泊）
〇二六一-八五-一二二一

一一／七（土）　小谷温泉
南小谷　九五五
松　本一一四九
一三〇五Wしなの九
長　野一三五四
一四二八
須　坂一四四六
バス一五三〇
蕨温泉一六〇〇　わらび野（泊）
〇二六-二四二-二九〇一

一一／八（日）　蕨温泉　九二五
須　坂　九五五
一〇〇八
長　野一〇四三
一二〇一しなの一二
塩　尻一三〇一
一三一一Sあずさ一八
新　宿一五三三
一六四〇はこね四一
本厚木一七二三

折挟　Y

日本秘湯の会九冊目のスタンプ帳が残り四つになっているので、二〇一五年度二回目のJR東日本大人の休日倶楽部の会員パスが発売されるのを承けて、スタンプ獲得のための旅行を計画した。毎週日曜日は娘の朋子が厚木交響楽団の練習日になっていて帰宅が二一

時三〇分頃になるところから、我が家で孫の佳奈と朋子の夕食の準備をする慣わしになっているのだが、これが旅行日程作成にそれなりの影響を及ぼすのである。

今回のパスは四日間一五〇〇〇円という仕立てであるが、上記の日曜事情もあって日曜日帰宅の三日間での旅行となった。蕨温泉を軸として旅行計画を組み立てようとした。この前わらび野へ出かけた時、この宿の女将さんの弟が近くの七味温泉で秘湯の宿を経営している由と聞いていたので、まず七味温泉に問い合わせたのだが、前後どちらにしても利用は出来ない様子だった。七味温泉はＪＲ東日本との契約で多くの部屋を抑えられているため、その企画に別途申し込みをすれば部屋を確保することは出来るのだが、その企画利用では秘湯の宿のスタンプは押せないというのである。何度かやりとりをした結果、結局七味温泉は諦めないわけにはいかなくなった。七味温泉の更に奥にある奥山田温泉の満山荘は、路線バスの終着点山田温泉からはタクシー利用でなければ足はないと言われて断念した。以前は元社長のお祖父さんが送迎を担当していたのだったが、年齢のため最近は送迎を止めているということだったからである。

次に宿の候補に挙がったのは白骨温泉だったが、以前、薬を使って白濁の湯を作り出す不正のあった温泉郷だという悪印象が尾を引いていて願い下げにし、結局一泊目に選んだ宿は小谷温泉の山田旅館ということになった。かつて何度も利用した宿である。その頃は南小谷まで直行する特急電車が何本かあったはずだと思ったのだが、現在は上記行程表に記載したあずさ三号だけの一本になっている。少々朝の早いのが気になったのだが、松本や白馬まで特急で行ってそこで乗り換えるのは気が進まなかったのだ。

久しぶりの山田旅館は少し勝手が違っていた。本館は以前と同じだったが、新館の風呂は場所が変わっていて、露天風呂が新設されていた。泊まりの部屋から浴場までの行き方も複雑化して行きにくくなっていた。食事のほうは以前と同じでなかなか充実したものだった。翌朝、精算の際、宿の女将さんが「助けていただいてありがとうございます」という挨拶をされた、その言葉が強く印象に残っている。利用客がそれほど少ないとは思えなかったが、登山や紅葉のシーズンが終わると例年客足は遠のくのだという。部屋から見える紅葉はまだ美しかったが、盛りは過ぎている由。

紅葉と言えば、中央線沿線や大糸線沿線は素晴らしい紅葉が随所に見られた。ところによって早い遅いの違いはあったが、いずれも紅葉で名を馳せるという名所ではなく、森や林が一帯で紅葉しているだけなのだが、赤も黄色も息を呑む見事な景観だった。

松本駅での乗り換えやトイレ休憩などに意外な時間がかかり、予定より一本後の特急利用となったため、宿の到着は一六〇〇時過ぎとなった。前回はボクたちの他宿泊客がなく閑散としていたが、今回は若い男女の団体客が利用していて、活気の溢れる大賑わいとなっていた。前回は昼のソバを食べすぎて、夕食をかなり残す失態を演じたので、今回は昼を控えめにして料理長自慢のメニューに挑戦した。　囲炉裏ではイワナの焼き魚に加えて姫リンゴも串焼きにされていた。口にしてみると結構柔らかくなっていて、充分温められたリンゴはまあまあの味だった。メインディッシュはブタの陶板焼き。カンパチの刺身、蛸の酢の物、茶碗蒸し、天ぷらなどこれでもかこれでもかと皿が続き、あたかも料理長から挑戦されているのではないかという趣だった。温野菜の蒸し物も結構行ける料理だったし、野菜の煮物も美味しく、出された皿はすべて食べ尽くした結果、料理長の挑戦に見事勝利を収めるところとなった。

蕨温泉からは須坂にも小布施にもほぼ同じ距離、車で三〇分ということだが、路線バスは須坂にしか通っていないため小布施へ出るにはタクシー利用となる。カミさんは大のタクシー嫌いだから小布施を止めて須坂に出ることとなった。長野からは当初新幹線経由を予定していたのだが、中央線の車窓からの眺めを楽しみたいとカミさんが言い、塩尻乗り換えで帰ることとなった。ところが、長野駅を出発する段から、新幹線の遅れを待つということで三分の遅れとなり、松本までの途中、交換列車の遅れが加わって、塩尻駅での乗り換えに大慌てを余儀なくされた。足の不自由を託つカミさんはホーム上の歩行、エレベータ、またホームでの歩行に疲れ果てて、危うく乗り継ぎに失敗するところだった。結果的にSあずさ一八号も五分ほどの遅れが生じていたため、何とか駆け込むことが出来て一本遅れとならずに済んだのだった。もし一本後となれば塩尻一三五六あずさ二〇号まで待つこととなり新宿到着は一六三四となるところだった。カミさんはこの塩尻駅の強行軍のため車中では眠りつき、窓外の景色にほとんど目が届かなかったのは皮肉なことだった。

この日の夕食は長野駅前東急デパートで買い入れた

小布施竹風堂の栗おこわだったが、ことのほか好評を博したのは望外の喜びだった。

秘湯の宿のスタンプは八個となって、一〇個まで後二つに迫っている。

［六二］　スタンプ帳一〇冊目へ（二〇一六年）

日本秘湯の会の会員宿めぐりでもらえるスタンプが九冊目から一〇冊目にさしかかろうとしている。［六一］までで九冊目が八個集印済みとなっているので、二個で九冊目が終わり三つ目から一〇冊目に入ることとなるのだ。例によってＪＲ東日本大人の休日倶楽部ジパングの会員パスを調べると、二〇一五年度三回目のパスが一月二一日から二月二日までの期間通用で販売されることが判った。

一／二一（木）　本厚木　一〇〇六はこね四
新　宿　一〇四八
一一〇五
東　京　一一一八
一二三六やまびこ五一
古　川　一四五二
一五一四
鳴子温泉一五五八琢秀（泊）
〇二二九-八七-二二一六

一／二二（金）　鳴子温泉一〇〇四

新　庄　一一〇八
一一一七つばさ一四〇
山　形　一二〇六
一四四四つばさ一三七
大石田　一五一六能登屋旅館(泊)
〇二三七-二八-二三二七
一／二三(土)　大石田　一一三一つばさ一四〇
福　島　一三一四
バス一三四〇
高湯温泉一四一六吾妻屋(泊)
〇二四-五九一-一一二一
一／二四(日)　高湯温泉一〇一五
福　島　一〇五一
一一五〇やまびこ四二
東　京　一三二四
新　宿　一四四〇はこね三三
本厚木　一五二三

このコースは前年の二〇一五年一月に立案して日の目を見ないままお蔵入りしていたものである。スタンプ帳一〇冊目にかかる企画として楽しみにしていたのだが、結果的に今回も見送らざるを得ないこととなった。

足腰や膝が衰えてきて歩行が意のままにならなくなってきているカミさんが近くの東名厚木病院で転倒防止講座を受けた折に勧められて血管外科の診療を受けたところ、腹部大動脈瘤の出来ていることが判明した。三、四年ほど以前のことであるが、半年ごとに検査を受けてきて、そろそろこの大動脈瘤の処置を考えなければなるまいとの診断で、その道の高名な専門医S医師(東海大学病院)による本格的な検査を受けることになったのが一月はじめのことだった。診察の結果、心臓の検査が必要だということになり、CD診断を経てカテーテルによる映像検査に進み、心臓の血管一本を広げるカテーテル手術へ進むこととなった。こうした事態が進行する中では九冊目のスタンプ帳完成などということは当然問題外のこととなり、旅行計画は無に帰すところとなったのだった。

カミさんの腹部大動脈瘤は二〇一六年七月から八月にかけて、カテーテル手術により、とりあえず当面の危機は回避された。生きている限り、血液サラサラの薬と、抗高血圧薬を服用することが必須のこととなったが、日常の暮らしは元に戻ったようである。足腰の衰えは少しずつ進行して、滅多に家から外へは出られ

なくなった。

ところが、二〇年来、華道池坊の研修を続けてきた娘朋子が、二〇一七年二月、研修コースの仕上げで京都の池坊会館に出向くこととなり、孫の佳奈も高校二年の終わりにさしかかるタイミングで、一緒に京都へ行かないかという誘いを受けるところとなった。条件的に、ここを外せばいつ行ける機会がめぐってくるか見通せないという判断もあって、娘親子と爺さん婆さんの四人で京都行きを敢行することとなった。孫の佳奈は高校入試の日程で一週間学校が休みとなる時期に重なっているという。

カミさんにとって最後となるだろう京都行きは二〇一七年二月一七日(金)から二泊三日で挙行された。外出を控えていたカミさんにとっては、小田急線小田原駅の改札口から東海道新幹線小田原駅改札口まで自力で歩行できるかまことに疑わしい。小田急線本厚木駅で小田原駅へ連絡を入れ、簡易車椅子を借用する手はずを整えた。小田原駅では、エレベータ利用で新幹線改札口まで車椅子のお世話になり、無事に予定したひかり五〇七の乗客となった。京都駅では、小田原駅から車椅子利用を依頼したはずだったが、到着時にはその用意がなく、車椅子が用意されるまでかなり時間がかかる始末となった。

八条口から乗ったタクシーは何故か時間貸しの観光タクシーの扱いが受けられず、普通運賃で北野天満宮まで行くこととなった。あらかじめ手配をしておかなかったせいでタクシーはちょっとぎくしゃくした。天満宮ももちろん観光の対象ではあるが、その実、天満宮前の「粟餅屋」に立ち寄ることが主たる目的となったのは、昼飯代わりのためだった。以前に来た時、粟餅はお土産のためで、そのものを食べるためでなかったのだ。漉し餡二本きな粉一本の一人前セットをそれぞれ皆で食べて天満宮参詣となった。カミさんは持参したシルバーカーに凭れて歩行するのだが、あまり効果があるように見えない。見かねて娘の朋子が社務所で車椅子を借りてきた。やはり事前の手配が必要のようだった。

天満宮では梅が三分咲きというところで、それでも馥郁たる梅の香りは味わうことが可能だった。山門の脇に菅原道真公の著名な短歌が掲げられている。読むともなく目をやると、「東風吹かば　匂い起こせよ梅の花　主なきとて　春を忘るな」と書かれている。最後の下二は「春な忘れそ」だったはずであるが、どうしてこういう改竄を堂々と行うのか不思議な気がし

た。
　天満宮から次は今宮神社。参拝のためと言うよりは、境内の入り口にあるあぶり餅のお店が目当てだった。これまでにも何度か訪れているが、お土産のためであることが多く、ボクはこれが初めてのあぶり餅だった。焼きたては流石にお土産で食す餅とは別物という感じである。
　初日の宿は柳馬場通六角上ルの綿善旅館。錦町市場にほど近い。落ち着いた雰囲気でゆったりしている。与えられた部屋も広く、清潔感に溢れている。夕朝の食事も充実していて好ましい。
　二日目はＭＫタクシーの観光タクシーを利用した。運転手はベテランの後藤弘文さん。カミさんの車椅子を細かな配慮で押してくれる。お陰で、錦市場もゆっくり歩くことが出来た。昼飯は岡北のうどんを予定したのだが、行ってみると長蛇の行列で、とても待ち切れそうになく、そのまま銀閣寺を目指すことにした。銀閣寺の駐車場の近くに「おめん」というどん屋があり、普段はここも行列して待つところだと運転手さんが言うのだが、この日はさほどの待ち行列もなく、比較的すんなりと暖簾をくぐった。同じウドンでも岡北の玉子あんかけふうと違い、「おめん」のうどんは温かいつけ麺で、ゴボウなどを載せて食す手である。ボクは冷たいモリで食べたが、なかなか美味い。
　食後はそのまま銀閣寺へ行く。これまで、南禅寺、永観堂、哲学の道まで来た記憶はあるのだが、銀閣寺は初めてという認識である。丁寧な後藤さんの解説付きで一回りした。もちろん山道コースまでは車椅子が入れなかったため割愛した。銀閣寺は一四八二年足利義政が山荘として造営に着手した東山殿を寺としたものだと言うが、庭園の結構など、月の愛で方一つをとっても風流人の考えることは到底理解不能である。ＭＫタクシーでは観光案内に力を入れていて、六ヶ月に一度乗務員のテストがある由。成績の上位からお客さんを付けるそうで、成績が下がれば収入も減る仕組みと伺った。
　二日目の泊まりはホテルカンラ京都。東本願寺の近くで京都駅にも近い。孫の佳奈が相川中学三年の時修学旅行で来て利用し、いいホテルだと印象に残っている由。その頃より更に増築して本館ができている。当時の本館は別館となった。当然、入り口からして違う。タクシーの運転手さんでも昔のカンラホテルの記憶しかなくて入り口を間違えたりすることもあるという。

三日目はゆっくり帰途につくだけの日程で、京都一二三二発のひかりで小田原には一四三六着となった。この旅行はカミさんが車椅子の助けを借りて移動することで成立したのだが、そのため多くの人々のお世話になった。改めて関係の皆さんに感謝申し上げたい。車椅子の助けがあればカミさんも小旅行が出来る目安を得たことは今後に役立ちそうな気がしている。たくさんの皆さんに迷惑を掛ける前提であるのが申し訳ない。